

ウィンターズ・ボーン（1）

ウィンターズ・ボーン、直訳すれば「冬の骨」。

これは、デブラ・グラニック監督の映画の題名です。

ヒロインを演じたのは、ジェニファー・ローレンスですが、凜とした17歳の少女の役を演じきっていたと思います。

この映画のあらすじをかいつまんで紹介しましょう。

舞台はアメリカ中西部の貧しい村、荒涼とした風景には生命の息吹さえ感じさせません。その中でもひとときわ荒れ果てた一角に、ジェニファー・ローレンスが演じるリーが、情緒不安定の母と幼い弟妹の面倒をひとりで見ながら生活しています。しかも、父親はドラッグの密造で逮捕され、保釈されたものの逃亡して行方不明になっています。

一家の生活は厳しく、日々の暮らしにも困る有様で、自宅で飼っている馬に餌をやることもできず、隣家に引き取ってもらわなければなりません。そうした中、保安官がやってきて、来週の裁判までに父親が出頭しなければ、保釈金の担保になっているこの家が没収されると告げられます。このため、リーは父親探しを始めることになるのですが、縁戚の大人達や父親の犯罪者仲間などから執拗な妨害を受けます。

家が没収されるのを防ぐためには、死体でもよいから父親を見つけ出すしかありません。

いよいよ時間切れかというところで、事情を知る大人から父親の遺体の在りかを教えられます。しかし、遺体は沼に沈められていて全部を引き上げることができません。最後は、父親の手首を切り落として保安官に届けます。父親の骨がリーを救うことになり、結果的にはリーの願いが叶えられてこのドラマは終わります。

確かに、リーは家を取り上げられずに済みますが、しかし、何かが良くなるわけではありません。ただ、元に戻っただけなのです。

そもそも「ウィンターズ・ボーン」とは、どのような意味なのでしょう。良くは分からないのですが、色々調べているうちに、こういう事なのではないかと思っています。

飼い主のちょっとした気まぐれに過ぎなくても、犬にご褒美の骨（ボーン）を投げ与えると、犬は喜びますね。与えた飼い主のちょっとした気まぐれ、これを「ウィンターズ・ボーン」というのではないかと。

そこで、作者がこの物語に何故「ウィンターズ・ボーン」という題名をつけたのか、少しは分かったような気がします。

この映画は、少女リーの生活を通してアメリカの格差社会の現実を描き出していますが、それは、一人の人間の努力では変えられない重い現実でもあります。

神様のちょっとした気まぐれ（言葉が過ぎれば、天の配剤と言い換えてもよいのですが）のせいで、リーは一時の危機を脱しますが、彼女に突きつけられている現実が変わりはなく、恐らく彼女は、その厳しい現実に対して、これからも崩れずに挑み続けて行くだらうと想像させます。しかし、映画の結末は、決してハッピーエンドではありません。（塾頭 吉田 洋一）